

Monthly Report

550名の卒業生・修了生が巣立つ ～卒業証書 学位記授与式を挙行～



阿部学長から卒業証書を受け取る体育学科総代の金須遼貴さん(右)

3月18日(土)、本学第五体育館を会場に「第47回体育学部卒業証書学位記授与式並びに第18回大学院学位記授与式」が挙行されました。

今年度は体育学部535名、国際交流締結大学である台東大学(台湾)とのダブルディグリー制1名の卒業生と、大学院14名の修了生、計550名が社会に巣立ちました。

阿部芳吉学長は学長告辞で「昨年開催されたリオデジャネイロオリンピックでは、本学の南條充寿教授や卒業生が活躍した。卒業生の皆さんには4年間で学んだことを3年後の東京オリンピックやその他社会の中で十分に活かしてほしい。」と卒業生にはなむけの言葉を送りました。

卒業生を代表して体育学科の佐々木優衣さんは「仙台大学では様々なことを学び、充実感で満ち溢れていました。卒業生を代表し、私たちを支えてくれたすべての方々へ心より御礼申し上げます。」と答辞を述べました。

式内では学生表彰式も行われ、第28回ユニバーシアード競技大会女子サッカーで第3位に入賞したINAC神戸レオネッサへの加入が決定している須永愛海選手(体育学科—福島・富岡高校出身)が理事長特別賞を受賞した他、12名の卒業生に学長賞やスポーツ功労賞、文化功労賞、同窓会賞が授与されました。

卒業生の皆さんには4年間仙台大学で学んだことを社会の中で還元し、仙台大学の名声を世界に向けて発信してほしいと願っています。

〈目次〉

550名の卒業生・修了生が巣立つ ～卒業証書 学位授与式を挙行～ ・2名の学生が成績優秀者として表彰 ・卒業生ピックアップ	1-4
2016年度 青海省国際科技合作賞を受賞	5
首都圏就職一日弾丸ツアーを開催	6
ベラルーシ共和国を訪問 ～東京五輪新体操合宿～	7
「子ども運動教育学科」 ～遊びが大好き、運動上手～	8
健康づくり運動サポーター事業 大学・地域評価会を開催	9
平成28年度学生表彰式を開催	10
ハワイ大学マノア校教育学部のHP で本学が紹介されました	11
ハワイ大学での献体解剖実習に参加	12
平成28年度キューブ新体操教室発表会	13
平成28年度陸上競技部春季強化合宿 台湾台東大学附属高校で実施	14

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
 直通 0224-55-1802
 Email kouhou@sendai-u.ac.jp



2名の学生が成績優秀者として表彰

3月18日（土）に举行された卒業式終了後、学長室において「日本介護福祉士養成施設協会会長賞」（介養協会会長賞）と「全国栄養士養成施設協会会長賞」（栄養協会会長賞）の授与式が行われ、阿部芳吉学長から表彰状が授与されました。

介養協会会長賞は本学健康福祉学科介護福祉士養成課程において、学業成績、人物ともに他の模範となるべき学生に贈られる賞で、今年度は笠原茉友子さん（柴田高校出身）が受賞しました。笠原さんは「まさか私が受賞できるとは思っていませんでしたのでうれしいです。4年間学んだことを就職先である青梅慶友病院で活かしていきたいと思っております。」と決意を新たにしていました。



阿部学長から手渡された表彰状を手にする笠原さん（右から2人目）、青柳さん（右から3人目）と大山健康福祉学科長（右）

また、栄養協会会長賞は本学運動栄養学科栄養士養成課程を優秀な成績で卒業する学生に贈られる賞で、今年度は青柳樹李亜さん（宮城・仙台高校出身）が受賞しました。青柳さんは「あっという間の4年間でしたが、勉強してきた成果が認められてうれしいです。」と受賞の感想を述べました。

感激を胸に、社会人としてなお一層羽ばたくことでしょう。

卒業生ピックアップ

この度めでたくご卒業された卒業生の中から、今後の活躍が特に期待される卒業生をピックアップし紹介します。今年度は、体育学科を卒業し、なでしこリーグの強豪チームであるINAC神戸レオネッサでプレーすることが決定している須永愛海さん。健康福祉学科を卒業し岩手県内の特別支援学校に現役合格した飯田和也さん、運動栄養学科を卒業し、米国のアスレティックトレーナー資格取得をめざしてハワイ大学マノア校に留学する村上泰司さんの3名です。

「INAC神戸レオネッサ」で活躍～東京オリンピックをめざして～ — 須永 愛海さん（体育学科卒業） —

12月に行われた「INAC神戸レオネッサ」への加入内定記者会見から3か月。卒業式では既にチーム合宿に参加するなどプロ選手としての活動をスタートさせ、真っ黒に日焼けしている須永愛海選手の姿がありました。

卒業式を迎えた感想を尋ねると「やっと卒業できるという思いと、友達などと離れることとなり寂しいという思いが交錯しています。」と率直に感想を話してくれました。この4年間の一番の思い出については「皇后杯で1勝できたこと。」だそう。後輩たちには「プロ選手として活躍できる選手がでるよう頑張ってもらいたい。インカレや皇后杯で1つでも多くの勝ち星を挙げてほしいと思います。」とエールを送りました。

1ヶ月ほどチームの合宿に参加していた須永選手はプロとのレベルの違いを痛感したようで、「大学のレベルとは全く違う。今は必死に食らいついている状況ですが、技術力の向上だけでなく精神的にも強くなっていきたいと思っています。」と抱負を述べました。



理事長特別賞を手にする須永選手

岩手県内の特別支援学校教諭に現役合格

—飯田 和也さん（健康福祉学科卒業）—

現役合格を果たし4月から、岩手県内の特別支援学校に採用が決まった飯田和也さん。高校時代の恩師が特別支援学校に転任したことをきっかけに特別支援学校教員という仕事の魅力を知り、特別支援学校の教諭になるために本学の健康福祉学科に入学しました。もともと体育が得意だった飯田さんは高校時代から続けていたハンドボール部に2年生まで所属。その後は、障害者競技スポーツ部ユニティで車いすハンドボールに挑戦したり、スラックライン同好会に所属するなど複数の競技に挑戦。クラブを掛け持ちし学生生活を送ってきました。様々な分野で活躍する仲間たちと出逢い共に過ごすことができた充実した4年間だったと飯田さんは言います。



飯田和也さん

仙台大学に入学してよかったと思うことの一つに、実技科目を「パワー全開」で受けることが出来たと話します。高校まで体育の授業はどちらかというと遠慮しながら実技をしていたので、大学の授業で伸び伸びと運動を楽しめる環境に素直に喜びを感じたそうです。

また、全国から集まるトップアスリートの同級生たちの能力の高さに感銘を受けたことをはじめ、自分をよく理解し言葉をかけて下さった先生との出会いにも感謝しています。と話してくれました。

大学生活において、教職を目指すために大切にしてきたのは、「自分の言葉で語れる経験値」を高めること。より多く子どもたちとの関わりの中で学びを得るため、柴田町立槻木小学校において「放課後先生」の学習支援や、仙台市内にある自閉症児のサポート施設でアルバイトしたり、教員の資質を磨くため試行錯誤しながら子どもたちとの関わりひとつひとつを大切にしてきたそうです。

教員のスタートラインに立つ飯田さんに、現在の率直な気持ちを聞くと「不安と焦りが一番大きい」と痛感しながらも、「早く子どもたちの顔が見たい。はじめは完璧でなくても、最善をつくす元気な先生を目指したい。そして子どもたちから親近感を寄せてもらえる先生になりたい。」と話して抱負を述べました。

飯田さんが晴れて教壇に立つ日も間もなくです。

米国アスレティックトレーナーを目指して渡米

—村上 泰司さん（運動栄養学科卒業）—

仙台大学は米国ハワイ州オアフ島にあるハワイ大学マノア校において、平成15年12月に「第1回アスレティックトレーニング（AT）研修」を実施後、翌平成16年4月には同大学から無料のインターネットによるAT分野の「遠隔授業」を行うなど、さまざまな学術的交流を積み重ねた結果、平成26年9月3日（日本時間の9月4日）に教育学部キネシオロジー・アンド・リハビリテーション科学学科（KRS）と国際学術交流に関する基本合意書を締結し、今日にいたるまで連携を深めています。

このたび、3月に本学を卒業した村上泰司君が、ATC取得を目指しハワイ大学院へ進学するため渡米することとなりました。

ATC (Athletic Trainer Certified) とは、NATA (National Athletic Trainers' Association) ・全米アスレティック トレーナー協会が公認するアスレティックトレーナーのことで、1991年にアメリカ医学会より準医療従事資格として認定され、現在は全米に300を超える養成校が存在し、40000人超のATCが活躍しています。NATA・ATCの主な役割は

1. 障害・怪我の予防と健康の保持
 2. 臨床評価
 3. 応急措置と緊急処置
 4. リハビリテーション
 5. 組織的・職業的な健康と福利
- ～ の5つです。

（次頁に続く）



村上泰司さん

8月の渡米を前に村上泰司君へ、ATCを目指すきっかけ・展望について語っていただきました。

①北海道から仙台大学へ入学を決めた理由

旭川南高校時代、サッカー部でディフェンスをつとめていた村上君は、将来的にスポーツに関わる職業につきたくて、サッカー部の顧問の先生に相談したところ、東北・北海道唯一の体育大学である仙台大学ならば広い視野で運動に関し学ぶことができるチャンスが豊富にあると勧められ、進学を決意したそうです。

②大学での生活・ATルームでの思い出

1年生から2年生の途中まで運動栄養サポート研究会に所属し、スポーツ栄養について学んでいました。その後、AT部に入り2年生からはラグビー部の見学実習、3年生からサッカー部の帯同、4年生はブースにおける活動をメインに行い、陸上競技会・明成高校のクローバーキャンプなど、さまざまなサポートを体験することができました。

③ATCになろうと思ったきっかけ

ATCである白幡先生や鈴木のぞみ新助手から、ATCを取得することで働く場所の選択肢が増え、自分になりたいと思う「研究職」に就く可能性も広まるとアドバイスいただいたことが、ATCを目指すきっかけとなりました。

アメリカはATがとても発展していることに加え、日本に比べて社会的な地位も確立されています。そのような環境で働けることは自分にとって素晴らしい経験になるのではと考えました。

④遠隔授業やUHにおけるAT研修の意味

遠隔授業は2年生で「NATAアスレティックトレーナーの実際Ⅰ」を、3年生で「NATAアスレティックトレーナーの実際Ⅱ」を取得しました。

普通の授業では学ぶことができないような緊急時対応計画の作り方などを学習する貴重な時間でしたし、プレゼンテーションの機会が多かったため、人前で自分の考えを伝えるスキルも得られたことが大きな収穫です。

UHにおけるAT研修には、1年生で「ビギナーコース」に、3年生で「アドバンスコース」に参加し、現地のアメリカ人・日本人ATCの方々の活動を自分の目で見ることができ、何よりの刺激と学習意欲につながりました。

⑤UH大学院を選んだ理由

UHでのAT研修を通し、UHの施設の素晴らしさを知り、お世話になった先生方がたくさんいらっしゃる事が決め手になりました。また、ハワイは日本人のATCが多々活躍しており、ATC分野においてもアメリカ50州の中で最も進んだ州の1つです。そこからスタートするのが、将

来アメリカで働きたい自分にとってベストであると考えました。

⑥今後の予定

今年の8月にハワイ州オアフ島へ渡米、ホームステイで英語に慣れながら、KRSに入学するための「大学院準備プログラム」で英語及び必要な授業を受ける予定です。UHの大学院入学にはTOEFLで79点が必要ですが、自分は77点なのであと一歩努力して、1年後には是非UH大学院入学を果たしたいと思います。

⑦ATC取得後の目標・豊富など

UHの大学院（マスターコース）で学び、無事にATCを取得することができたらまずATCとしてアメリカで現場経験を積みたいのです。その後、働きながらドクターコースで学び、PhD.を取得後、大学の研究職としてアメリカで働き続けたいと考えています。

⑧仙台大学で学んだ意味

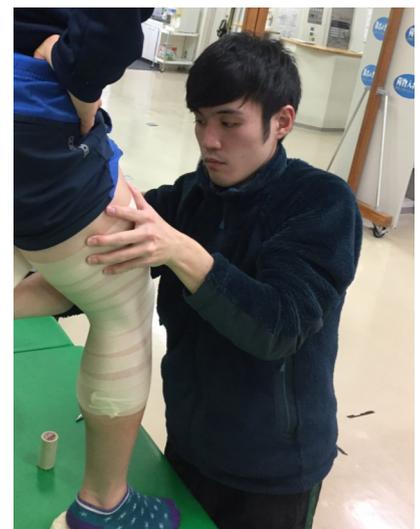
仙台大学に入学しなければ、ATCという職業があることもどのように自分がその資格を取得できるかも全く知らず、今頃は違う道を歩いていました。

これだけたくさんのATC取得者がいる大学は日本にないと思いますし、ハワイ大学との提携で、常に海外に開かれた可能性を学生に示してくれるので 仙台大学で学んだ4年間は何よりも大切な人生の礎になりました。お世話になった先生方みなさんに感謝しています。そのためにも精一杯努力してATCを目指します。

本学のATC取得者の1人でATルームに勤務する鈴木のぞみ新助手（明成高校卒業—仙台大学卒業—ハワイ大学院マスターコースにて修学—AT資格取得）は村上君に対し「多くの人と出会い、コミュニケーションをとりながら、自分の個性を伸ばしていってもらいたいです」と語っています。

2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツや健康分野に興味・関心が高まる

中、ATCの存在は世界的規模で徐々に高まっていくのではないのでしょうか。仙台大学出身の新たなATC誕生をあたたく見守っていきたいものです。



選手にテーピングを施す村上さん

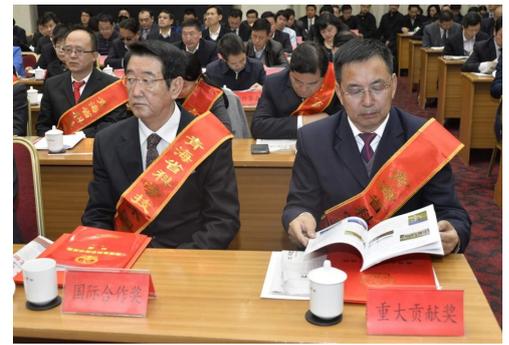
「2016年度青海省国際科技合作賞」を受賞

2月27日青海省政府は勝利賓館で「2016年度青海省科技奨励大会」を行い、仙台大学は「青海省国際科技合作賞」を受賞しました。

仙台大学は青海省体育科学研究所の友好機関として、2008年から同省とのスポーツ科学交流が始まり、2011年に青海省体育科学研究所と「国際交流および友好機関」の協定を結びました。協定締結以降の仙台大学からの各種協力は科学研究及び人材育成にと多岐にわたり、青海省体育界に今までにない大きな貢献をさせていただいてきました。具体的には高地トレーニング、高地と健康増進などの領域において、計5つの国家及び青海省国際科技合作研究プロジェクトを展開し、そのうち「日・中高地および平地居住の選手の体力および血液成分に関する比較研究」、「日・中の高地及び平地居住の高齢者における運動能力および脂質代謝に関する研究」においては、青海省科学技術進歩の三等賞の成果を収めました。人材育成においては、青海省体育界の高度人材育成のために入学試験免除、学費軽減などの多方面の支援を行い、これまで、仙台大学大学院の修士課程に6名が留学し、うち4名が既に修了して現在体育科学研究界で活躍しています。また、2名がスポーツ教育及び運動訓練を専攻し、現在大学院2年生として研究しています。その他の国際交流としては、青海省政府体育代表团及び科学技術代表团は日本訪問の際に仙台大学からの積極的な協力を得た上で、日本の国立科学スポーツ研究センター、早稲田大学及び筑波大学を訪問し、良好な交流関係を作り上げてきました。

さらに、スポーツ施設の視察、スポーツ大会の運営及びスポーツくじ・競輪などのスポーツ産業発展の状況を把握でき、青海省の国際ロードレース大会の運営及び青海省スポーツ産業発展の良い参考例となりました。これらは、仙台大学との提携があって初めて多方面のスポーツ交流ルートを開発することができたと言っても過言ではありません。

【報告：大学院事務室 馬 冬梅】



授賞式に出席した桜井理事（左）



青海省の省長とも接見しました

トヨタ自動車 豊田章男社長が仙台大学を2度目の訪問 —経団連オリンピック・パラリンピック等推進委員会—

3月3日（金）に日本経済団体連合会のオリンピック・パラリンピック等推進委員会委員長である豊田章男トヨタ自動車社長が仙台大学を訪れ、SMBC日興証券でアスリートとして活躍する加藤由希子選手（平成28年卒業）や本学の陸上部選手と交流しました。

豊田社長が本学を訪問するのは昨年の4月に引き続き2回目で、残念ながらリオデジャネイロ・パラリンピック大会に出場できなかったものの、2020年の東京パラリンピック大会出場に向けて前向きにチャレンジを続けている加藤選手を激励されていました。陸上競技場で行われた加藤選手のトレーニング視察の際には、加藤選手のトレーニングの様子を興味深くご覧になっていたのはもちろん、砲丸投げややり投げの競技特性などについて熱心に質問されていました。また、豊田社長自らが「砲丸」や「やり」を投げるなどの場面もあり、大変和やかな雰囲気でした。

トレーニング視察の後にはLC棟に場所を移し、豊田社長や加藤選手、本学の陸上競技部の選手などが懇談を行いました。懇談では、競技に打ち込むことの意義や今後の目標などについてそれぞれの意見を出しながら選手たちは今後の活躍を誓っていました。



加藤由希子選手と豊田章男社長

首都圏就職一日弾丸ツアーを開催

平成29年3月5日（日）に首都圏就職一日弾丸ツアーを開催しました。

保護者会より援助を受け、本学学生への就職支援の一環として、首都圏で開催される就職イベントに参加するという企画です。事前に2日間にわたる事前指導を受けることを条件とし、募集したところ体育学科3名、健康福祉学科4名、運動栄養学科6名、スポーツ情報マスメディア学科4名、現代武道学科3名、計20名の申込みがありました。

これまでは早朝5時に出発をし、夜中の2時に帰ってくるという行程で運営していましたが、昨今のニュースで度重なる長距離バスの事故の心配があることに加え、大学に戻ってからの交通手段が無いなどの理由から、昨年度より新幹線での移動に変更することとしています。

当日は仙台駅に8時30分に集合し、団体乗車券を使い、東京・お茶の水経由で水道橋駅まで移動し東京ドームプリズムホールへ向かいました。合同企業説明会は12時から18時までの6時間でしたが、最高で8社のブースを訪問した強者もありました。合同企業説明会終了後には、文化放送キャリアパートナーズの岡田氏より、今日の経験を今後どのように活かしていくかについて講義が行われ、学生たちは疲れも見せず真剣に耳を傾けていました。引き続き、講義終了後に首都圏学生との交流会を実施しました。来て頂いた学生は、明治大学1名、立教大学2名、日本女子体育大学4名の学生でした。双方とも就職に意識の高い学生たちでしたので、お互いに初対面とは思えないくらい溶け込んでいました。

学生たちは連絡先を交換し合うなど終始和やかな雰囲気でした。帰りの新幹線では、早速一緒に撮った画像が送られて来る等、更に交流を深めているようでした。今回のツアーの参加者は、首都圏の学生にかなり刺激をうけた様子で、今後も学生たちが希望する職種へ就くことができるよう支援して参ります。

【報告：入試創職室 中鉢 芳尚】



各企業のブースで説明を聞く参加者

平成28年度 仙台大学合同業界研究セミナーを開催

3月15日（水）に柴田町内にある「ホテル原田inさくら」を会場に平成28年度仙台大学合同業界研究セミナーが開催されました。説明会には45社にご協力いただき、学生は過去最高となる258人が参加し、会場は終始、自分の興味がある企業や業種の情報を集めようとする学生で熱気があふれていました。

セミナーでブースを出展していただいた企業の中には本学の卒業生の姿も多く、先輩が後輩に会社の説明を行う姿もあちらこちらで見受けられました。

セミナーに参加した運動栄養学科4年の小島萌里さん（青森・八戸北高校出身）は「入学当時からスポーツに関心を持ち、特にスポーツ栄養に関する勉強をしてきました。今回のセミナーに参加して各企業の方々の話を伺い、やはり自分がやりたいことはスポーツなんだということを再確認できました。また、他で開催される企業説明会よりもアットホームな雰囲気だったので緊張せずに話しを聞くことができました。自分の目標を達成するために今後も積極的に就職活動を続けていきたいと思っています。」と説明会に参加した感想を話し、これからの就職活動に向けて決意を新たにしていました。

本学では毎年、合同業界研究セミナーを大学生の就職活動がスタートするこの時期に開催しています。



本学の卒業生（左）からの会社説明を熱心に聴く学生

ベラルーシ共和国訪問報告 —2020年東京五輪・パラリンピック 新体操チーム合宿—

2月21日（火）～25日（土）に日程で、朴澤泰治理事長・学事顧問、山梨雅枝講師、河野未来助教、橋谷孝治白石市企画情報課長4名がベラルーシ共和国を訪問しました。今回の渡航では、大学との協定継続手続き及び2020年東京五輪・パラリンピックの事前合宿の誘致活動に関する新体操関係者との打ち合わせなどが行われました。

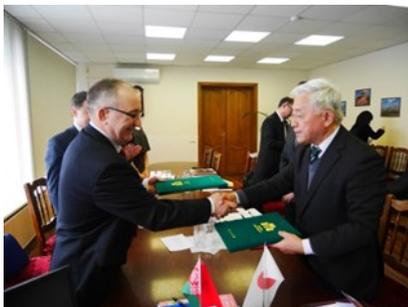
22日は、オリンピックアカデミーを訪問し、イリーナ会長より幼児期から実施されているオリンピック教育システムについてレクチャーを受け、ベラルーシでのオリンピックに対する意識の高さを感じることができました。

23日のディナモ訪問では、ヘッドコーチであるレパルスカ氏とお会いしました。その後、ナショナルチームの練習環境を確認し、誘致に際して大学での準備物などを確認。また、ナショナルチームの演技を披露していただき、充実した時間を過ごしました。その後、体操協会に移動し、誘致に関する具体的な話し合いを通し、2017年中の訪問日程や宿泊方法など、具体的な内容を確認しました。

これから、新体操を通じてベラルーシと本学との交流がますます盛んになり、学生にとってもよい刺激になるのではないかと考えております。

仙台大学と柴田町、白石市でつくる事前合宿誘致推進協議会は、平成29年2月2日の記者会見でベラルーシ新体操ナショナルチーム事前合宿の招致が決定したことを発表しています。

【報告：講師 山梨雅枝】



ベラルーシ国立体育・スポーツ学院にて



在ベラルーシ日本大使館にて徳永博基大使と



ベラルーシ体操協会にてレパルスカヘッドコーチ（右3番目）と体操協会副会長（右2番目）

あの日から6年・・・ —東日本大震災追悼式—

未曾有の大震災から6年・・・

校舎を見守る形で建立された慰霊碑の前で今年も追悼式が行われ、学生や教職員約120名が参加しました。

東日本大震災では本学の学生3名が津波被害に遭い、尊い「いのち」が犠牲となりました。3月11日現在、東日本大震災による全国での死者15,893名、行方不明者2,553名という甚大な被害を残し、今なお行方不明者の捜索活動は各地で行われているます。

追悼式の冒頭、朴澤泰治理事長・学事顧問から「犠牲となった3名の学生はもちろん、数多くの尊い命に対し深く追悼の意を表すと共に、6年経った今年のご遺族にとっては7回忌という年になり、今後もあの忌わしい出来事を忘れることなく、そこから得た教訓を生かしていくことが大切です。」と挨拶され、柴田町内や船岡駐屯地から流れてくるサイレンや鐘の音に合わせ、参列者全員で黙とうを捧げ、犠牲者のご冥福と、被災地の一日も早い復興を祈りました。

その後ひとり一人慰霊碑の前に用意された3名の遺影にむかい手を合わせ、それぞれの思いと共に追悼の意を表していました。



慰霊碑に遺影を手向ける参列者

【報告：教育企画室 室長 川村昭宏】

「子ども運動教育学科」～遊びが大好き、運動上手～

入学や入園の季節を迎えましたが、特にこの時期「遊んでばかりいないで勉強なさい。」

読者の皆さんは、親からこの言葉を言われたことがありますか。逆にご自分のお子さんに対して言ったことはありませんか。いずれか、あるいは両方、誰しも1回は経験があるのではないかと思います。

けれども、1歳になる自分の孫を見ておると、這う、つかまって立つ、伝い歩きをする、あるいは音楽に合わせて体を動かす、等々全ての新しい動きの獲得は興味関心から始まっているような気がしてなりません。言わずもがなですが「遊んでばかり」です。危ない物を取り上げようとすると大きな声で泣き抵抗します。どれもが遊びたいという気持ちから始まっているように思えます。

そこで思い出したのが「遊戯は文化よりも古い。人を夢中にさせる力の中にこそ遊戯の本質がある」という文です。これはヨハン・ホイジンガ氏が彼の著書ホモ・ルーデンスの中で語った言葉ですが、孫の様子を見ているとホイジンガの叙述には、なるほどと納得してしまいます。遊びは無限ともいえる多様な価値を持っています。積極性、努力、心身の健康、情操、言語、思考、体力など実現してくれるものは遊びです。そしてその幼児の遊びの大部分は体を動かすことです。

スポーツ科学研究で著名な杉原隆氏は、走る、運ぶ、登る、降りる、跳ぶ、押す、転がる、転がすなどの多くの運動パターンを日常頻繁に経験している幼児ほど運動能力が高いという研究結果を発表しています。

仙台大学子ども運動教育学科では、平成24年に文部科学省が策定した「幼児期運動指針」との整合性を図りながら、幼児にどんな運動遊びをさせたら、

- ・意欲的で
- ・スポーツが好きで
- ・運動能力の高い
- ・人（子どもから大人まで）

を育成していけるのか学生の皆さんと一緒に考えていきます。運動遊びの支援助長を軸にして心身の発育・発達を促す研究を進めてまいります。

子どもの保育と教育の在り方についてじっくりと理解を深めてまいりましょう。

【子ども運動教育学科 教授 郡山孝幸】



プレイルームに通う子どもたちと
朴澤理事長・学事顧問をはじめとする教職員

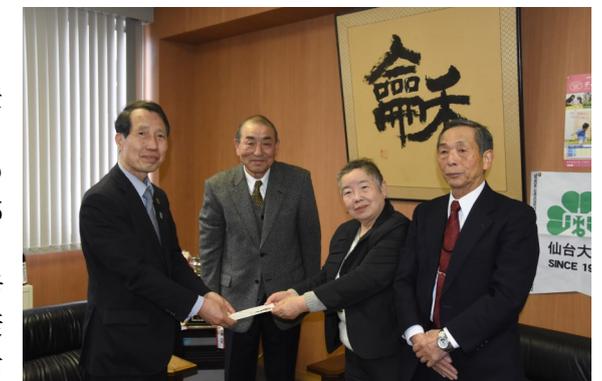
「柴田健康スイミングクラブ」からご寄付をいただきました

3月2日、「柴田健康スイミングクラブ」の会長小室悟氏、副会長南まさこ氏、元会長白鳥峻氏の3名の方々が仙台大学に対し、これまでのお礼と今後の活動に役立ててほしいと表敬訪問があり、寄付金を頂戴しました。

「柴田健康スイミングクラブ」は、仙台大学が地域住民の方々に「仙台大学中高年水泳教室」として呼びかけ、平成15年5月からはじめた地域貢献事業の一つです。

平成22年4月から現在の名称に変更し、週2回、年間80日活動しており、メンバーは現在85名、平均年齢は70.5歳、健康志向が高く、コミュニケーションを大切に楽しく若々しく活動しています。

東日本震災後、本学のプールは使用できなくなりましたが、「私達高齢者にとって、大学の先生の水泳指導は素晴らしい喜びであった」、「水中の有酸素運動は健康増進に大変効果が現れた」と継続して活動に参加できたことのお礼を学長に伝えていました。メンバーの中には16年間という長い期間、参加されている方もおいでになり、仙台大学の事業が地域住民の健康支援となっていることが伺えました。



阿部学長に寄附金を贈呈する南まさこ副会長

【報告：健康福祉学科長 教授 大山さく子】

健康づくり運動サポーター事業 大学・地域評価会を開催

3月6日（月）に柴田町、亶理町の行政担当者や参加者の代表者をお招きして、大学・地域評価会を開催しました。この評価会は、柴田町やその他近隣市町村の健康づくりに関する連携事業について、1年間の事業の実施状況や内容、派遣している健康づくり運動サポーター*（以下、健サポ）の地域での活動を振り返ることを目的として、毎年実施しています。

今回は橋本副学長を議長とし、小池教授から平成28年度の事業報告及び健サポの資格認定状況に関して報告しました。行政の担当者の皆さんからは「住民から運動教室や健康イベントの話聞く機会が多い。それだけ皆さん楽しみにしていらっしゃるということ。これからも是非継続して活躍してほしい」等の声をいただきました。また、参加者の代表から「学生の対応が非常に良く、身体を動かすことはもちろん、人との交流も健康づくりにはとても良い。今後も学生と住民の交流を増やしていきたい。」という意見を頂戴しました。

参加した健サポ上級の資格を取得している宍戸香菜子さん（健康福祉学科4年一宮城・仙台東高校出身）は「上級の実習では、健康イベントの企画を通して、リーダーとしてスタッフを動かす難しさ、スムーズな進行の進め方等、様々な課題があった。実習を通して得た経験をこれからの活かしていきたい。」と感想を述べました。

学生たちの実学の間として、本事業は非常に価値の高いものだと感じています。今後も多くの健サポを養成し、授業では身に付けることのできない実践力のある学生を輩出していきたいです。

【報告：新助手 齋藤 まり】



評価会であいさつする橋本実副学長

健康づくり運動サポーター 認定証書及び感謝状授与式を開催

3月17日（火）に健康づくり運動サポーター（以下、健サポ）の認定証書授与式及び、災害ボランティア感謝状授与式を開催しました。今回は平成28年度後期の資格認定評価会で認定された初級12名、中級8名、上級1名の計21名に対して認定証書が授与されました。今回の認定者を含め、延べ501名が本資格を取得してきました。

今回、上級を取得した浅井美樹さん（健康福祉学科3年）は「私が目指している社会福祉士は、社会福祉に関わること全てが仕事の範囲です。様々なジャンルがある中で共通するのは、地域を知り、対象者に合わせて計画するということです。そういった力を実習で身につけられると思い、上級実習に臨みました。実践の中で学び得たことを、資格取得に活かしていきたいです。」とコメントしました。

また、認定証書授与式に続けて、災害ボランティア感謝状の授与式も行いました。今年度、女川町や亶理町で実施した被災地支援活動にボランティアとして参加した13名に一人一人、橋本副学長から授与されました。積極的にボランティア活動に参加した木村金次郎さん（健康福祉学科4年）は「被災を受けた故郷・女川町のために何かしたいと思い、この活動に参加しました。今後は女川町で就職します。大袈裟ですが、僕の力で女川町を元気にしていきたいです。」と力強く話してくれました。

学生たちは地域の方々に見守られながら、育てていただいています。今後も学生たちが実学の中で学びを深めていけるよう、多くの学生たちにこの活動を広めていきたいと考えています。

【報告：新助手 齋藤 まり】



橋本実副学長から上級の認定証を受け取る浅井さん



資格が認定された学生の益々の活躍が期待されます

平成28年度学生表彰式を開催

3月24日（金）にKMCH（クラブハウス棟）大会議室を会場に「平成28年度学生表彰式」が行われ、今年度は全国大会などで優勝や入賞を果たし本学の名声を高めた1団体、個人12名が表彰されました。

表彰式の冒頭で志賀野博学生部長より、学生表彰の趣旨などの説明があり、引き続き表彰状の授与が行われました。表彰状授与後に阿部芳吉学長は「日頃からの練習の成果だと思います。2020年には東京オリンピックがあります。メダルを獲得できるような中心的な選手として活躍できるよう頑張ってほしい。」と挨拶しました。

表彰状を代表で受け取った漕艇部の村上善章さん（健康福祉学科3年一宮城・塩釜高校出身）は「自分の努力が実ったことは大変うれしいです。今年は昨年以上に活躍できるように練習をしていきます。」と受賞の感想を話しました。



今後益々の活躍が期待される受賞者

亘理町で「健康づくり茶話会」を実施しました — 亘理町サポートセンター解散に伴い最後の活動 —

3月24日（金）、亘理町下茨田南集会所において今年度最後となる災害ボランティア「健康づくり茶話会+楽しい運動」を実施しました。この日は、橋本実副学長と大山さく子健康福祉学科長、健康づくり運動サポーター上級の宍戸香菜子さん（健康福祉学科4年一宮城・仙台東高校出身）が参加しました。

災害ボランティアは、震災直後から体育館などの避難所での健康支援活動を実施し、その後も仮設住宅や災害公営住宅で住民の健康づくりやコミュニティ再構築を目的とし活動を継続しています。

この日は、40代から80代後半と年齢層も幅広く、笑顔の素敵な23名の方々が足を運んでくださいました。1時間程度の運動では、まず頭の体操で緊張をほぐし、次に上肢・下肢の筋力トレーニング運動等身体機能の維持や向上、脳の活性化を図りながら介護状態を予防するために、「1・2」の掛け声や歌などを交ぜながら行いました。参加者の皆さんは、お互いに顔を合わせ、学生やスタッフ達とのふれあいから笑い声が絶えず、運動を通し、交流を楽しむ様子が伺えました。

運動後の茶話会では、机を囲み参加者全員でお茶を飲みながら会話がはずみました。参加者の方からは、「体を動かしてスッキリした」「毎月この会を楽しみにしている」「また来月も来てね」と声をかけていただきました。

この活動では「亘理町サポートセンター」の看護師の方々にもスタッフとして協力をいただけてきましたが、当センターは今年度3月で解散となります。今回が最後の活動となることから、これまで一緒に活動し、協力を頂いたスタッフの方々に対し、仙台大学から感謝の意を表しました。また、卒業式を終えて今回最後の参加となった宍戸さんを含め、スタッフとの別れを惜しんでいました。

春は別れと出会いの季節ですが、また気持ちを新たに4月から亘理町との連携事業として活動を継続していきます。東北・宮城の復興、健康づくりに貢献できるよう、これからも学生たちと共に積極的に頑張りたいと思います。

【報告：健康福祉学科長 教授 大山 さく子 ・ 新助手 松浦 里紗】



運動後の茶話会の様子



参加者の皆さんと最後の記念撮影

ハワイ大学マノア校教育学部のHPで本学が紹介されました

News

Unique access to 1-2 week-long athletic training experiences continues to attract international visiting students to KRS

Posted on March 17, 2017

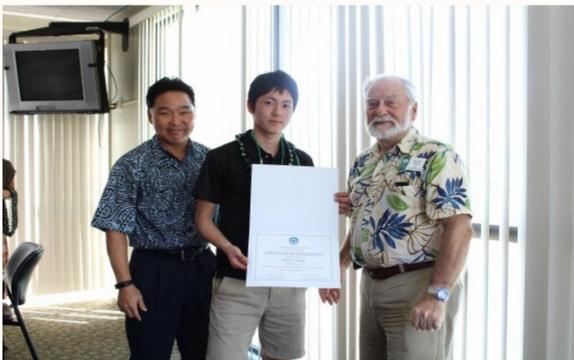
Ten students and four faculty members from Sendai University visited KRS from February 13 to 16 for the 24th Sendai University Athletic Training Study Tour, followed by KRS' fourth installment of the Hawaii International Athletic Training Education Clinic (HI-ATEC) from March 7 to 14. Both were led by KRS faculty Dr. Kaori Tamura and Dr. Yukiya Oba.

As in previous tours, Sendai University students began their athletic training tour with two English conversation sessions by English language instructor Don Pomes focusing on medical/healthcare-related conversation and terminology.



During the athletic training seminar "graduation ceremony," Sendai students are required to share their thoughts on their experience in English to a room full of people

Another unique aspect of the study tour are the opportunity to observe university level courses such as Olympic Lifting by Tommy Heffernan, Upper Extremity Assessment by Dr. Yukiya Oba, and Therapeutic Exercise by Dr. Bret Freemyer. Dr. Oba also delivered a special seminar session specifically for Sendai University students on what it takes and what the key steps are to becoming an international student and pursue healthcare profession training at KRS.



Sendai student with KRS chair Dr. Nathan Murata and COE's Dean Young at the graduation ceremony

Thanks to KRS' relationship with McKinley High School, the students were also given access to observe how McKinley High School athletic trainers (Tomoki Kanaoka and Leanna Goeckeritz) work and function as healthcare professionals within the school and HIOE system. The students also went on an Athletics Department tour and Women's basketball and Baseball game observation, followed by participation in NCAA Division I athletics events (a new addition to the athletic training study tour offering). In addition to structured experiences, the program participants also engaged in less formal contexts, such as the get-together lunch with KRS Athletic Training students where they had a chance to practice their English.



HI-ATEC participants take a break from cadaver dissection

KRS recently also created another similar program, with the difference being that participants do not necessarily need to only be from one university - the Hawaii International Athletic Training Education Clinic or HI-ATEC program, run once per semester. For the Spring 2017 HI-ATEC, athletic training students from Ritsumeikan University and Sendai University participated in a 6-day Gross Anatomy course hosted by KRS, in collaboration with the John A. Burns School of Medicine (JABSOM) which included access to cadaver dissection which is hard to come by in Japan.

KRS will continue hosting these unique international athletic training seminars and clinics, and specifically hopes to also increase participation in the newly developed HI-ATEC program.

<概説>

①アスレティックトレーニング研修 (AT) ビギナーコース (通算24回目)

KRS (キネシオロジー&リハビリテーション・サイエンス) が実施するユニークなアスレティックトレーニングを経験するプログラムに、海外からの学生達が継続的にKRSを訪問しています。

2月13日～16日、教育学部KRSが学術提携している「仙台大学」の、今回で24回目となるアスレティックトレーナー研修が行われ、学生10名と引率者4名がKRSを訪れました。また、ハワイ国際アスレティックトレーニング教育クリニックが3月7日～14日にかけて実施した検体解剖実習にも、同大学より学生2名と新助手1名が参加しました。どちらもKRSのドクターである田村薫里氏と大庭有希也氏が担当しています。

アスレティックトレーニング研修では、ドン・ポメス氏による2度の英会話の授業、大学レベルのオリンピックリフティングを経験するトミー・ヘフマン氏によるトレーニング実習、大庭氏には仙台大学の学生達がどのようなステップを通して国際感覚を身に付けることが出来るか?について指導いただくなど、個性あふれる講義が用意されました。

修了式にはヤング学部長、ムラタ学科長をはじめ、関係者全員の前で学生一人一人が英語でスピーチをし、緊張感のなかで英語を話す貴重な学びになったようです。

マッキンリー高校における現場でのATCの働きぶりを見学した後は、UHの女子バスケット試合・野球試合の観戦・UHの学生との交流会が行われ、実践的な英語学習の場ともなりました。

②検体解剖実習

KRSは昨今、AT関連で、単体ではなくとも希望する大学があれば、合同で実施するという別のプログラムを作り、今回実施しました。それはUHの医学部の協力による、日本では行うのが難しい「検体解剖実習」です。立命館大学の学生及び、仙台大学の学生2名と新助手1名(前田美優:運動栄養学科2年・太田遥:健康福祉学科2年・鈴木のぞみ新助手)が参加し、検体解剖に特化した内容について深く学ぶことができました。

KRSはこれからも医学部の協力を得ながら、ATおよび医学的なセミナーを企画・実施していきますので、海外の学生達のますますの参加を願っています。

【HP URL】

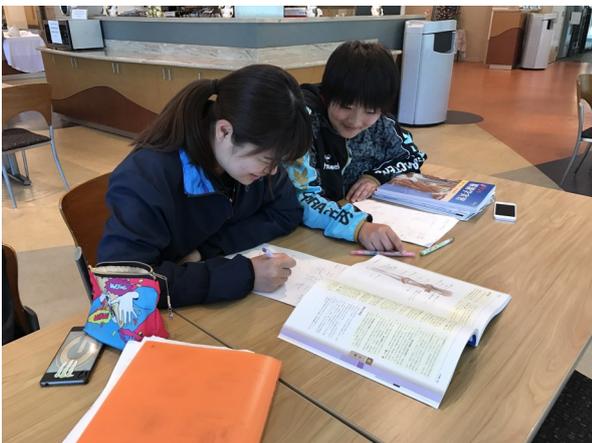
<https://coe.hawaii.edu/about/news/2017/03/unique-access-to-1-2-week-long-athletic-training-experiences-continues-to-attract-international>

ハワイ大学での献体解剖実習に参加

ハワイ大学におけるAT研修の中に、今回新しく献体解剖実習が加わりました。アメリカでは生前の遺体提供意思表示により、事故や病気で亡くなられた方のご遺体が大学の医学部に寄付されることがあります。献体解剖とは、学生がそのご遺体を解剖させていただくことで、人体についてより深く、より詳細な知識を学ぶことのできる授業です。日本においては医学部で学ぶ医学生のみ献体解剖を受講できますが、アメリカではアスレティックトレーナーも医療従事者の一員として考えられており、アスレティックトレーナーを目指す学生も献体解剖を受講可能です。

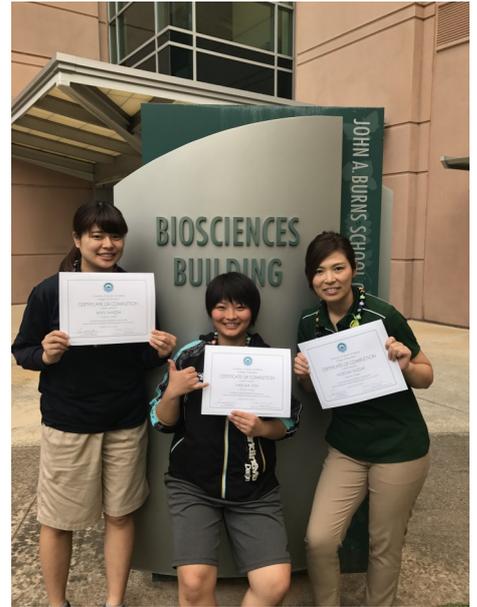
本研修はHawaii International Athletic Training Education Clinic(HI-ATEC)という、ハワイ大学キネシオロジー学部が提供している研修プログラムの一つです。短期献体解剖実習は今回が2回目の実施で、講師兼コーディネーターはハワイ大学医学部特任教授・同大学キネシオロジー学部教員の田村薫里先生と大庭有希也先生でした。HI-ATEC研修のねらいの一つには様々な大学からの参加者との交流があり、今回は仙台大学の学生以外にも、立命館大学の学生や治療家の方など、合わせて7名が受講していました。ハワイ大学の大学院生や本学の白幡恭子助教にもお手伝いいただき、学びだけでなく交流も深める事ができました。

詳しい研修内容として、日程は全6日間で全身の解剖を行ないました。午前には実技を交えた講義を通して、体の構造のポイントを理解しそのイメージを膨らませます。午後は夕方まで医学部の献体解剖ラボにて、自分自身で体にメスを入れていき、イメージとリアルな身体の組織の違いを丁寧に確認していきましました。講義内容は全て英語ですが、内容の理解がより優先されるということで、時には日本語も交えて講義や解剖の指導が進められました。学生たちは、夜には寮の勉強スペースにて予習・復習に励み、少しでも多くの事を吸収できるよう努めていました。



熱心に勉強する学生

参加学生は健康福祉学科3年太田遥と運動栄養学科3年前田美優で、2人は今回の研修について以下のように述べています。「今回のハワイ研修では、日本で経験することが難しい献体解剖に参加させていただきました。実際に解剖し、自分自身の目で人の身体の骨・筋肉・神経・内臓等の構造を見ることができ、衝撃や感動を受けると共にとても勉強になりました。今回の研修から得た知識を、AT部の活動の一環である、スポーツ選手の怪我の予防やアスレティックリハビリテーションをより質の高いものにするために活かしていきたいです。」(前田)「今回のハワイ研修では献体解剖の実習を行い、日本ではできない貴重な経験をすることができました。今まで教科書などで学んでいた骨や筋肉、関節を実際目で見て肌で感じ、やる前は不安がありましたが、感動と提供してくれた人への感謝を感じ、多くのことを学ぶことができました。今回のハワイで学んだものを今後の活動に活かし、それを応用するためにもまだまだ学ぶべきことがあると思います、これからも色々な活動に参加していきたいです。」(太田)



その他、私たち、ハワイで行われたアスレティックトレーナーの普及啓発イベントにも参加しました。主催者はハワイ研修で毎回お世話になっているマッキンリー高校ATの金岡友樹氏で、全米アスレティックトレーニング協会(National Athletic Trainer's Association : NATA)生誕67周年を記念し、カピオラニ公園を6.7時間リレーマラソンを走るなど、現地アスレティックトレーナーの方々と交流を深めるとても良い機会でした。

本プログラムは来年度も継続される見通しで、今後も多くの学生にこのような素晴らしい経験を通し、英語力や自己の成長に繋げていってもらいたいと考えています。ハワイAT研修の各種プログラムを活用することで世界で通じる人材育成を目指し、今後は研修事前指導の充実などを視野に入れ取り組んでいきます。

【報告：新助手 鈴木 のぞみ】

平成28年度キューブ新体操教室発表会 —招待選手として新体操競技部が参加—

3月25日、白石市ホワイトキューブにて「平成28年度キューブ新体操教室発表会」が開催され、招待選手として新体操競技部8名と新入生2名が参加させて頂きました。今年2月に白石市・柴田町・仙台大学の3者協定で、事前合宿誘致決定を発表してから初めての発表会ということで、たくさんのご来賓の方々、保護者、観客の皆さまにご来場頂きました。

私たち新体操競技部は、シーズンインに向けて3月22日（水）から24日（金）までホワイトキューブにて合宿をし、その成果を発表会で演技させて頂きました。まだまだ課題の残る演技ではありましたが、大変素晴らしい環境の中で、集中して練習を行い、清々しい気持ちで4日間を終えることができました。

今回の発表会エンディングでは、映画「座頭市」の音楽に合わせて、男女68名の選手たちが「和」をテーマに色とりどりのゴースを使い、力強く演技を行いました。白石市体操協会会長の日下イサヲ先生からは「多くの方の支えがあり、長年に渡って新体操が愛される環境が創られてきた。今回のベラルーシナショナルチームのキャンプで、さらに新体操の魅力を感じてもらい、世界に目を向けた選手育成を行っていきたい。」とお話を頂き、発表会の締めくくりとなりました。

【報告：新体操競技部 監督 助教 河野未来】



参加者全員での記念写真



本学新体操競技部の選手

今年度も「教採塾」を開講 —できるだけ多くの「桜咲く」を目指して—

春休み中、3月中旬ごろのB棟二階講義室で黙々と勉強している学生が一つの目標に向かって努力している姿があります。

今年の宮城県・仙台市教員採用試験出題が大幅に変更され、新たな教員採用試験に対応しなければなりません。

大きく変更になった点は、宮城県、仙台市が個別に試験を実施すること、また、中・高保健体育で一次体育実技がありましたが、次年度から実技試験が二次に、その代わりに一般教養全般が組み込まれたことによって全般的な知識教養を身に付けなければなりません。

これまで中・高校で国語、数学、理科、社会、英語等を学習しているところを思い起こしながら「確かな学力」として勉強しているところです。

今後、7月下旬の教員採用に向けて「教採塾」を開講してできるだけ多くの受験生が「桜咲く」を目指して頑張っているところです。



夢の実現を目指して勉強に取り組む学生

【教職支援センター長 教授 青沼 一民】

平成28年度陸上競技部（投てきブロック）春季強化合宿 初めて台湾台東大学附属高校で実施

3月22日（水）から27日（木）の6日間の日程で、陸上競技部（投てきブロック）春季強化合宿を台湾台東大学附属高校で初めて実施しました。

強化合宿を計画するにあたり、私たち投てきブロックには高いハードルがありました。それは投てきのトレーニングは投てき物が落下した際に芝生を傷めることや危険性が高いという理由から、たとえ陸上競技場であってもトレーニングを断られることが多いということです。「温暖な地で思い切り投てきのトレーニングが可能な場所はないか？」と思いを巡らせているところに、交流大学の台東大学で実施できるかもしれないという話がありました。現地の事前調査には朴澤理事長・学事顧問にも足を運んでいただき、また、台東大学の梁先生にも全面的に協力をいただき、今回の強化合宿の開催となりました。

移動の都合から、6日間の渡航期間のうち実際にトレーニングを行ったのは4日間となりましたが、その施設は最高でした。自由に投げることができる陸上競技場、その中にはウェイトトレーニング場も併設、アイシング用の氷も競技場内にありました。また、トレーニングが終了すれば、徒歩3分で食堂へ。バイキング形式のおいしい食事を1日3食提供していただきました。宿も徒歩5分の距離にあり、シーズンインを控えた学生たちにとっては最高の環境下でのトレーニングとなりました。合宿中に実施した模擬試合（トライアル）では自己新記録を超えた学生も多数で、とても良い成果となりました。

また、附属高校にも陸上競技部があり、そちらの高校生たちと一緒にトレーニングをする機会を持つことができました。最初は遠慮がちでしたが、同じ陸上競技に取り組むアスリート同士なので、すぐに打ち解けることができました。「英語がお互いにできたらなあ」という言葉も聞こえ、語学力の大切さも身を持って体感していたようです。

台東最終日には、台東大学の見学も行いました。世界有数の図書館では、その洗練されたデザインや機能、真剣に学ぶ学生たちに本学学生も刺激を受けていたようです。

今回の合宿では、素晴らしい合宿の場を提供していただいたことへの感謝、台東大学や附属高校陸上部の更なる強化、また、今後益々お互いの交流が盛んになることを願い、投擲種目で使われる円盤ややりなどの投擲器具を台東大学に寄贈させていただきました。

今回、たくさんの方々のご協力をいただき、合宿は大成功に終わることができました。普段とは異なる環境下での強化合宿は学生たちにとって多くの発見や学びがあったと思います。これらの経験を活かし、2017シーズンでは良い結果が残せるように日々取り組んでいきたいと思ひます。

【報告：陸上競技部コーチ 講師 宮崎 利勝】



名取部長（前列左）から台東大学へ投擲器具が寄贈されました



台東大学付属高校陸上部の皆さんとの記念写真

今年度で退職される方々の送別の会が行われました

今年度を持って退職される方々の送別の会が3月31日に行われました。会には退職される駒板公一さん、雁平栄さん、小室良太郎さん、小池壽雄さん、山本幹男さん、古山彰さんの6名が出席され、吉田龍哉事務局長が「これまでの間、本当にお疲れ様でした。今後の人生も楽しんでください。」と挨拶されたあと、6名の方々からもそれぞれご挨拶をいただきました。

本日の送別の会にご出席された皆様をはじめ、退職された皆様方には健康にご留意され、益々お元気で活躍されることをお祈りいたします。



ご退職された6名の方々